高島市 歴史散歩

高島郡の成立

1月1日にマキノ町・今津町・朽木村・安曇川町・高島町・新旭町が合併して新しく誕生した高島市の地域は、古くから高島郡と呼ばれてきました。

高島郡の成立は、今から約1300年前にさかのぼります。大宝元年（701）に定められた大宝令では、全国的に国名が統一され、現在の滋賀県は、「近江」と称されることになりました。同時に、国内の行政区画が整備され、以後長く続く日本の行政区画である国・郡・里制度ができあがりました。里はその後、郷に変更され、高島郡内にはこのころ、神部・三尾・高島・角野・木津・桑原・善積・川上・大處・鞆結の郷が成立しました。

郡には、行政を掌握する庁舎である郡衙（郡家）が設置され、郡の政治を司る郡司がおかれました。

高島郡の郡衙の場所は、現在確定されていませんが、発掘調査の結果などから、今津町の日置前遺跡、高島町の鴨遺跡などが郡衙跡の可能性をもつ遺跡であると考えられています。

大處神社

津野神社

筏流し

安曇川

水尾神社

木津浜

高島郡は、早くから湖西の交通の要衝として発展しました。湖岸にそって走る国道161号は、古代には北陸道、中世・近世には西近江路・北国海道などと呼ばれ、日本海と都を結ぶ大動脈として活用されました。また、朽木谷の山中を南北に走る国道367号は、北国と京の都を結ぶ最短路として知られます。さらに、今津町から西へ向かう国道303号は、若狭小浜と琵琶湖を結ぶ街道として、また国道161号のうちマキノ町海津から北へ向かう山越えの道は越前敦賀と琵琶湖を結ぶ街道として、それぞれ多くの人や物が行き交いました。

また、安曇川や石田川の水運などが利用できるため、杣（材木をとる山）が発達し、郡西部にひろがる山々から多くの木が川をくだって琵琶湖沿岸まで運ばれ、湖上の水運を利用して京・大阪方面へ運ばれました。

こうした、道や川をとおしてさまざまなつながりをもってきた「高島郡」という地名は、古代・中世・近世をとおして、そして明治になり町村制が施行された後も、変わらず使い続けられてきました。

その「高島郡」も、昨年12月31日、1300年の歴史に終わりをつげ、新年の幕開けとともに、「高島市」が誕生することになりました。

編集後記

住民票交付を受ける玉垣市長職務執行者

▼市民の皆様、明けましておめでとうございます。平成17年元旦、高島市がついにスタート！雪の降る中行われた1日の開市式では、旧5町長から玉垣市長職務執行者へ、それぞれの町で育まれてきた想いと共に職務の引き継ぎが行われました。また4日には、新市のシステム稼働開始にあたり高島市となって初めての住民票が発行されました。新年の訪れとともに新しい歴史のページが開かれていきます。▼人口約5万6千2百人、滋賀県で一番大きな面積をもつ市となったふるさと高島ですが、まずは、北はマキノの国境から南は高島の鵜川まで、駆け回ってみたいと思います。（広報担当T）

発行・編集　高島市役所企画部秘書広報課
〒520-1192　滋賀県高島市新旭町北畑565番地　0740-25-9130

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

高島市 歴史散歩 No.2

高島市の式内社

平安時代中期に書かれた古代法典の一つである『延喜式』全50巻の中には、「神名式」という古くからの神社の名前を記した巻があります。ここに収録されている神社は、式内社と呼ばれ、特に中世のころには神道の研究が盛んになったこともあって、格式の高さを誇りました。

「神名式」には、全国の3132座の神社が記されています。「座」とは神様の座るところ、という意味で、一つの神社に2座以上の祭神がまつられていることもあります。この式内社の地域的な分布をみると、近畿地方またはその周辺に多くの神社が集まっていることがわかりますが、その中でも、近江国すなわち滋賀県には155座があり、これは、大和国、伊勢国、出雲国についで多い数となっています。さらに、その近江国内で郡別にみると、もっとも多いのが46座のある伊香郡で、その次に多いのが34座のある高島郡、すなわち現在の高島市ということになります。なぜ、このように伊香郡や高島市に式内社が多いのか、確定的なことはわかっていませんが、北隣の越前国敦賀郡にも式内社が多いことなどから考えると、近江から越前にかけて在勢力基盤とした継体天皇政権と関係するともいわれています。

『延喜式』の成立から、すでに1000年以上が経過していますが、式内社は、そのほとんどが現存しているといわれています。高島市でも、多くの神社が、現在も式内社または、その論社（同一名称などの複数の神社が一つの式内社に該当すると考えられる場合の神社）として信仰の対象となっています。

（文化財課）

呂倶神社（今津町梅原）

三重生神社（安曇川町常磐木）

編集後記

写真は、放水訓練を見つめる兄弟。大好きな消防車を寒い中、じっと見続けてました。

▼高島市がスタートして1カ月が過ぎました。市役所の業務も新体制で動き始め、多くの市民の方が訪れてくださいます。そんな中で「（市になって）用事が聞きにくくなった」とか「電話の愛想が悪くなった」と言われる方がいます。そんな時はどうかご意見をお寄せください。広報の役割はお知らせすることはもちろんですが、『今、市民の皆さんが何を思っているか』を聞くことが大事なことだと思っています。▼創刊号を見て大勢の方がご意見をくださいました。全部いっぺんにはなかなか難しいですが、教えてもらったこと、良い方向に変えていきます。皆さんの声をお聞かせください。

（広報担当J）

発行・問合せ　高島市役所企画政策室広報係
TEL 0740-25-8000　FAX 0740-25-8001　http://www.city.takashima.lg.jp/　E-mail koho@city.takashima.lg.jp

広報たかしま
（平成9年5月1日号）
第42号

高島市 歴史散歩

No.29

高島市・春の祭礼めぐり

毎年4月から5月にかけて、古くからの様式や伝統を伝える春の祭礼が市内各地で行われます。

4月18日に行われる川上祭は、川上庄内（今津町北部一帯とマキノ町南部の一部）の春祭で、大竹に青・白・赤の紙の飾りをつけた大幟の巡行や、小学生の子どもたちによる踊り子の囃しなどで知られています。その起源については、明確なことは分かっていないものの、一説には平安時代後期の長暦3年（1039年）に始められたとも言われ、古くからの歴史や独特の祭礼組織を伝える行事として知られています。

川上祭

竹の先に四角い板をつけた的を持って練り歩く「奴振り」の行事で有名な大荒比古神社の七川祭は、嘉禎元年（1235年）、この地を本拠地としていた佐々木高信が、戦勝を祈願し、12頭の流鏑馬と12基の的を献納したのが始まりといわれています。現在、祭礼は5月4日に行われ、12基の的と2振の樽による奴振りや、流鏑馬1頭と役馬8頭による競馬が奉納され、毎年多くの見学者で賑わいます。

湖西唯一の曳山祭である大溝祭は、城下町大溝の商人たちの富と高度な文化的教養がつくり上げた祭礼であるといわれています。現在は、江戸時代、城下町として繁栄した湊・巴・宝・勇・龍の5つの山組町がそれぞれ曳山をもち、毎年5月3日の宵宮と4日の本祭に巡行が行われます。また本祭では日吉神社境内に5基の曳山がそろい、その前で神輿振りが行われるなど、見所の多い祭りとしても知られています。

これら3つの祭礼は、滋賀県選択無形民俗文化財にもなっており、多くの氏子や地域の人々によって大切に伝承され続けています。

（文化財課）

七川祭

編集後記

ひと冬越えて蓄えられた生命が、さまざまな色を発し高島を彩ります。
（新旭町深溝で）

▼田んぼに水が張られ、水面がキラッキラッと輝いています。やがてそこは、人の営みによって淡い緑に染まっていきます。田植え前線の到来です。▼今月の表紙は3月31日に行われたOBC高島少年野球教室の様子をご紹介しています。いつもはフェンス越しに眺めていた選手が、今日は170人の子どもたちの特別コーチに。じっくり、みっちり、時に笑いを交えながらの指導に、子どもたちの顔もほころびます。途中行われたデモンストレーションでは、選手たちのプレーに大人も子どもも釘付けに。目をキラッキラッと輝かせながら、「あんなふうになりたい。」「いつか一緒にプレイしたい。」子どもたちの夢も膨らみます。夢があると実現する楽しみができますね。「夢しか実現しない」ビジネスフォーラムin高島での審査員の言葉を思い出します。夢の実現に向かって歩み続けるチームに、今年もご声援を！（広報担当O）

■発行／高島市　■編集／企画部秘書広報課
〒520-1592　滋賀県高島市新旭町北畑565番地　☎0740(25)8130
■http://www.city.takashima.shiga.jp
✉t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

広報たかしま（平成18年11月1日号）　第54号

高島市 歴史散歩 No.35

大溝城下町を歩く

現在の勝野地域（JR近江高島駅付近）は、昔、大溝城下町として栄えており、大きく分けると二時期ありました。

ひとつは、天正6年（1578年）に織田信長の甥にあたる信澄が、信長の命により明智光秀の親張りである高島に築城された大溝城の城下町の時期。

もうひとつは、元和5年（1619年）、伊勢上野城（現三重県津市）の城主分部光信が近江国高島に入封して大溝陣屋（役人などの詰め所）を構えた時期です。

大溝城・大溝陣屋とともに城下町は北側に形成されました。城下町の規模は、南は勝野町から北は新町にいたる約1,280メートル、東西は東の北舟入町から西は石垣町にいたる約330～440メートルで南北に細長く20の町から成り立っています。

町屋の総家数は272軒あまりで、天保9年（1838年）には1,188人。その内、男が570人、女は618人であったそうです。

城下町の構造は、南から北へのびる四筋の通りから成っており、東から本町通・中町通・西町通・石垣通となっています。また、本町通には、南から勝野町・南市本町・新庄本町・今市本町が連なって、中町通には、南市中町・新庄中町・今市中町通、西町通には西町・伊勢町があり、西町の一筋西には石垣町が加わります。本町通の続きは、西に屈曲して小田川を渡ると、また南北に新町通の今市新町・新庄新町・矢島町が続きます。

▲大溝城下町割図

つぎに東西の通りですが、本町と中町・西町の三筋の通りには、南端から職人町・紺屋町が東西にのび、本町通と中町通を結ぶ十四軒町、本町通から湖岸に北舟入町、江戸屋町・舟入町・長刀町・六軒町・銅干橋と続きます。

城下町の地名で、南市・新庄は、天正六年織田信澄が新庄城から大溝城に移った時に移されたと推測され、分部光信入封以後に、現在の形になったといえそうです。

今、大溝城下町を散策すると辻々に町名の道標が設置されていて、往時をしのばせてくれます。秋の一日、ぜひ大溝城下町を訪れてください。新しい発見に出会えるかもしれません。

（文化財課）

編集後記

花の見ごろが終われば新そばももうすぐ
（今津町日置前の「そば畑」で）

▼10月になると箱館山麓には、そばの花が一斉に開き、まるで白いじゅうたんを敷き詰めたように広がっています。これから気温が下がると、花とは対照的な真っ黒い実をつけます。新そばは、毎年11月23日に行われるそばフェスティバルにお目見えします。▼8月・10月はスポーツイベントたけなわ。今月の表紙は、10月13日(土)サンルーフ今津で行われた「第5回ジュニアフットサルフェスティバルin今津」の様子をご紹介しています。スポーツ少年団の保護者会がスタッフ兼サポーターのこの大会。県内はもとより、大阪、京都から18チームが参加。コートでの華麗なボールさばき、相手をかわしてシュート。とても小学生とは思えないプレーの連続に目を見張るばかり。子どもってすごいですね。私たち大人が考えているような枠なんか遥かに超えてしまいます。子どもたち無限の可能性。発揮する場を提供するのも、私たち大人の役目です。

（広報担当O）

■発行／高島市　■編集／企画政策部広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地　☎0740(25)8130
■http://www.city.takashima.shiga.jp
✉t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 行政ISO推進中！ISO14001認証取得済み。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

広報たかしま
（平成20年9月1日号）
第74号

高島市 歴史散歩 No.45

守り続けられてきた風景 ～これからの重要文化的景観～

▲高島市海津・西浜・知内の水辺景観

今年3月28日、国の重要文化的景観に選定された「高島市海津・西浜・知内の水辺景観」は、古くから水辺で続けられてきた生活文化が作り出す文化的な風景として、全国的にも高い評価を得ています。

この地域は、日本海と琵琶湖を経て京都・大阪とを結ぶ湖上・陸上交通網の拠点として、古くから多くの人馬や荷物が行き交ったところで、現在でも宿場町・港町の面影を色濃く残しています。一方で、アユ漁を中心とした琵琶湖の漁業の拠点としても発達し、それに伴った伝統的漁法や水産物の加工技術等が地域に伝わり、さらにそれらに関係する建物や施設、漁具類なども数多く残されています。

特に、この地域の特徴的な景観として写真等でも紹介されることの多い、海津・西浜の湖岸に続く石積みは、元禄時代に波除けのために築かれたものと伝えられ、江戸時代の地域の様相を今に伝える貴重な文化財です。その他にも、水路や内湖のなごりやイケと呼ばれる共同井戸といった水辺の生活を語るもの、江戸時代の宿場町としての発展を物語る町家建築など、文化的景観にふさわしい要素が随所に残されています。

また、地域には数多くの寺院や、石灰の生産・出荷で栄えた大正～昭和初期に建てられた趣向を凝らした民家、地域の浜辺や湿地に生息する貴重な植物など、普段はあまり紹介されることの少ない文化財が存在することも、調査によってあきらかになりました。市では、この海津・西浜・知内地区に残された素晴らしい景観を、今後は国の文化財として大切に守り育てることを目標に、具体的な整備方針等については、地域住民の皆さんと相談をしながら、未来に誇れる地域作りを目指していきたいと考えています。

また今年度からは、新旭地域のヨシ群落やエリ漁、カバタの水利用を中心とした文化的景観を新たな候補地として保存活用委員会を立ち上げ、調査研究を進めています。

（文化財課）

▲針江大川周辺

編集後記

いい世さ　来い、来い！

▼親にとっては「やっと」、子どもたちにとっては「もう」が付いて終わる夏休み。夏休み前の計画や目標を見つめながら、ここに来ての「もう」の真相は如何に。「もうは未だなり、未だはもうなり」という相場の格言は、転じて物事が予想通りに運ばないことのたとえだそう。でも、真っ黒に日焼けした姿からは、夏休みの充実ぶりがうかがい知れます。学校は2学期がスタート。子どもたちの元気な声と笑顔が溢れます。▼踊りに太鼓、夜店に花火。夏休みは、夏まつりたけなわ。第2回YOSAKOIまつりin高島では、レッスンを受けた7チームが舞台に。息の合った踊りを披露してくださいました。よさこいソーランの魅力は、アップテンポな音楽と躍動感あふれる踊り。演者の笑顔とは裏腹に、走ったり飛び上がったりとすごい運動量。それに加えて猛暑とあって汗だく。「メタボ対策によさこい！」と言いたいところですが、相当メタボな私には食事からが得策かも。「未だはもうなり」で腹八分目。食欲の秋を迎え、予想通りに運びますかどうか。

（広報担当O）

■発行／高島市　編集／企画部秘書広報課
〒520-1592　滋賀県高島市新旭町北畑565番地　☎0740(25)8130
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

広報たかしま 9 1日号 平成21年 No.98

秋の収穫に使用した民具

市内各地では稲刈りの時期を迎えています。現在は、ほとんどの農家がコンバインなどの機械を使って稲刈り・脱穀を行っていますが、わずか50年程前は、こうした収穫の作業はほとんど機械化されず、人々の経験と知恵で編み出された道具を使って人力で行われていました。

機械が導入される以前の収穫の作業は、地域や時代によって違いはありますが、おおよそは鎌を使って人の手で行う稲刈り、その稲を稲木に干して乾燥させた後、稲から籾をはずす脱穀、そして籾の皮を剥く籾摺りという手順で進められました。この中の脱穀の作業のためには、早くからさまざまな道具が考案されてきました。

江戸時代はじめ、脱穀のために使われたのはコキバシ（扱箸）と呼ばれた道具で、これは大型の竹の箸のようなものに稲穂を挟んで籾をしごき取るというものでした。このコキバシに変わる道具として元禄時代（1688～1704）に和泉国（現大阪府南西部）で考案されたといわれるのがセンバコキ（千歯扱）で、これは木の台の上に鉄または竹製の櫛状の歯を水平に並べたもので、台に付いた足置きを踏んで本体を固定しながら、歯の上に稲束をたたきつけ、その稲束を引き抜いて籾を落とす、という仕組みのものでした。少しずつ稲穂を挟みながら作業をするコキバシに比べ、稲束のまま脱穀ができるセンバコキの登場は画期的で、これによって脱穀の能率は飛躍的に向上したといわれています。センバコキは江戸時代末期から明治時代にかけて、改良を経ながら長い間全国各地で使用されました。

▲センバコキ

その後、登場したのが足踏み脱穀機で、これは明治時代末に考案され、大正時代初期には全国に普及したといわれています。足踏み脱穀機とは、木または鉄製のドラムに逆V字型の太い鉄条の歯がさしてあるもので、ドラムを足踏みペダルで回転させて、そこに稲束をあてて脱穀をするというものでした。この足踏み脱穀機は、センバコキよりも脱穀をさらに効率よくさせるもので、戦後まで全国各地で使用されました。

動力による脱穀機が登場したのは昭和30年頃で、昭和50年頃のコンバインの登場で、収穫作業の機械化はさらに進み、現在に至っています。

ところで、皆さんは写真のセンバコキや足踏み脱穀機を実際に見たことがありますか。おそらく足踏み脱穀機ですと「昔は使っていた」というご記憶のある方も多いのではないでしょうか。マキノ資料館では、こうした少し前の農作業で使われていた民具や生活道具などを展示しています。また、現在は展示室の一部を利用して、昔ながらの暮らしや地域の歴史を学ぶための参考図書が閲覧できるコーナーを設けています。身近な地域の歴史に少し触れてみようというときは、ぜひマキノ資料館にお越しください。（文化財課）

▲足踏み脱穀機

編集後記

今年は、日本で46年ぶりの皆既日食がありました。高島市ではどっしりと居座った梅雨前線の雲に阻まれ、世紀の天体ショーとはなりませんでしたが、一瞬だけ雲の切れ間から欠けた太陽が顔をのぞかせました。今年の梅雨は、本当に長かったですね。新聞によると去年より22日、平年よりも15日も遅く、観測史上最も遅い梅雨明けになったそうです。明けてからも雲が多く、じめじめした日がお盆まで続くとは、今年はなんとも太陽が恋しい夏になりました。長い夏休みが終わり、子どもたちの学校生活も再開。生活のリズムと身体を早く学校モードに切り替えて、2学期に臨んでほしいものです。夏休み期間中、居間に居座った前線もようやく動き出しますね。（広報担当O）

■発行／高島市　編集／企画部秘書広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

安曇川水系固有のシコブチ信仰

近江は京や奈良の都に近く、都の造営等のために多くの用材を必要とした古代において、とりわけ森林に恵まれた高島郡は建築用材を切り出す杣山（そまやま）が多くあり重要な役割を果たしていました。

東大寺の建築用材も、安曇川から琵琶湖・淀川・木津川の水運により運ばれたと言われています。木材を水上輸送するのは筏（いかだ）で、渓流部では流れも速く大きな岩や淵なども随所にあり、筏乗りにとっては命に関わる危険な仕事でした。

そこで、その危険な仕事を無事に行えることを願って、川の魔物を取り除く神さま「シコブチ神」が誕生し、この安曇川水系の人々の間で信仰されていきました。シコブチは、思子淵・志子淵・志故淵・志古淵などといろいろな字を宛てていますが、川の水流を司り、とりわけこの川筋でさかんに活動した筏師を守る神と伝えられてきました。

シコブチ神を祀る社（まつ やしろ）は多く、安曇川上流の大津市葛川坂下町・坊村町・梅ノ木町、中流域の朽木岩瀬と安曇川町中野、支流針畑川流域の朽木小川、京都市左京区久多町中の町の7か所の神社を特に「七シコブチ」と呼んでいます。この他にも源流となる京都市左京区大見町や百井町等にも存在しています。

安曇川水系固有のシコブチ信仰が、いつ頃から行われていたかを知ることのできる確かな史料はありません。しかし、一水系のごく限られた範囲に、これだけ多くの「シコブチ神」が祀られていたということは、朽木を中心とする安曇川水系が、はるかいにしえから豊富な森林資源をもとに、林業を中心とした生業が営まれた場所であったことの証といえるでしょう。

（朽木村史編さん室）

●安曇川水系のシコブチ神社等一覧

所在地	神社等名	備考
京都市左京区百井	思子淵神社	
京都市左京区大見	思子淵神社	
京都市左京区尾越	思子淵神社	
京都市左京区久多中の町	志古渕神社	
大津市葛川坂下町	思子渕大明神	
大津市葛川坊村町	志古淵神社	地主神社 境内内社
大津市葛川梅ノ木町	志子渕神社	
高島市朽木小川	思子淵神社	
高島市朽木平良	思子淵神社	
高島市朽木能家	思子淵神社	
高島市朽木雲洞谷（家一）	志故淵神社	
高島市朽木岩瀬	志子淵神社	
高島市朽木宮前坊	思子渕大明神	邇々杵神社 境内社
高島市安曇川町中野	思子淵神社	
高島市朽木栃生（右渕・長谷川）	思子淵講	御講

※太字は「七シコブチ」と呼ばれる7神社

▲思子淵神社（朽木小川）

▲志古淵神社（朽木岩瀬）

▲思子淵神社（安曇川町中野）

編集後記

道路脇の温度表示が1度また1度と下がり、近づく冬将軍の足音が聞こえてきそうです。刻々と寒くなっていくこの季節。食卓の主役の一つは何と言っても鍋料理ですね。

鍋料理といえば、それを囲む配役が多彩で、具材の順序や火加減などを細かく仕切る「鍋奉行」、灰汁をすくい取る「アク代官」、コンロの火を調整する「火消し」、ひたすら食べる時を待つ「待ち奉行」に「待ち娘」などなど、さながら時代劇。そして、その人気の秘訣は、仲間や家族とワイワイ楽しめること。冬将軍の襲来には鍋で迎え撃つ。鍋奉行が菜箸片手に大活躍。最後は桜ならぬ海苔が舞う、心と体が温まるストーリーを今晩ぜひご家庭で。

（広報担当O）

■発行／高島市　編集／企画部秘書広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

■発行／高島市　編集／政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000㈹
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

高島市 歴史散歩 No. 67

古文書の語る海津の石垣

～マキノ古文書クラブの活動から～

▲琵琶湖上から見た海津の石積

高島市マキノ町の海津湊から大崎寺への道に、旦過公園があります。

ここには、お堂があって、古来京都・大阪・畿内から北国へ行き交う人々が一旦休みをとり、時には宿泊し、次の地へと旅立ち去ったと言います。

ここに立ち、往古への思いを馳せると、側には樹齢70年余りの桜が渾身の力を振り絞って花を咲かせます。桜木は風雪に耐え、大きなくぼみやゴツゴツとした樹肌をあらわします。この並木の続く向こうに、海津湊の石垣が椀型になって西浜へと続き、桜と石垣は一対を成して往古の時代を語ってくれます。

▲海津湊（昭和初期）

海津の石垣が築造されたのは、江戸期の元禄16年（1703年）です。

築造前の状況を『大崎寺文書』（天和2年（1682年））では、次のように語っています。

「・・最前より御訴訟申し上げ候とおり、浜がわに私どもの住み居り屋敷13軒は、波除け石垣崩れ少しの風波にも家へ水が入り、難儀に仕り儀にご座候ゆえ、ご慈悲に願いの通り、入用銀6貫19匁5分をお貸し下され成され候ハバ、有難く存じます・・・・」（読下し文）とあります。

村人達は、度重なる大波によって石垣が崩れ、被害に苦しみ借財を重ねていました。このような中、元禄14年、西浜村に甲府藩領代官・西与一左衛門が就任しました。

村人達の苦しみに同情した彼は、就任早々に石垣築造の偉業を成し遂げ、しかも、費用を村民の負担による「自普請」でなく、お上が負担する「御普請」であったといいます。

西与一左衛門は、思いやりと実行力のある人物で、西浜・蓮光寺入口の案内板には、次のように書かれています。

「元禄14年に・・・西与一左衛門が風波のたび宅地に被害の甚だしいのをあわれんで石垣を築いた。・・・この石積みのおかげで水害がなくなった。村人たちがその業績をたたえ、院内に碑を建立し、毎年3月15日には、西与一左衛門の法会が営まれている。」

古文書に直接触れてみるのは、楽しいものです。生の声が伝わってきます。古文書の解読、または整理のボランティアで、「郷土の歴史探訪」をしてみませんか？

●マキノ古文書クラブの活動

毎月第3金曜日　13時30分～16時
▼場　所
マキノ土に学ぶ里研修センター
問 文化財課
☎(32) 4467

編集者のつぶやき

もうすぐ暑い夏がやってきますね。7月には高島の夏の風物詩「ペーロン大会」が行われます。私も参加したことがありますが、ペーロンを真っ直ぐ漕ぐのは大変難しく、すぐに右へ左へ迷走。失敗すると転覆することも。チームワークが何より大事です。今年はどんな熱いレースが行われるのか、今から楽しみです。

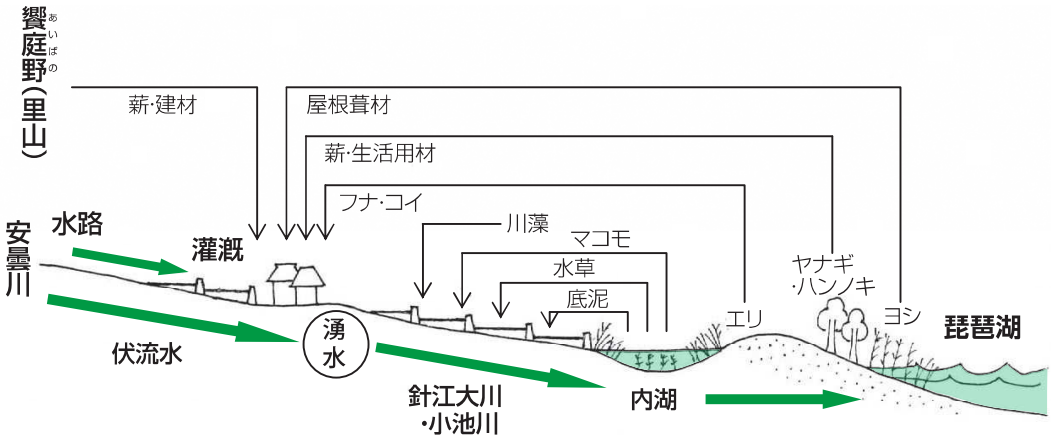
（広報担当S）

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

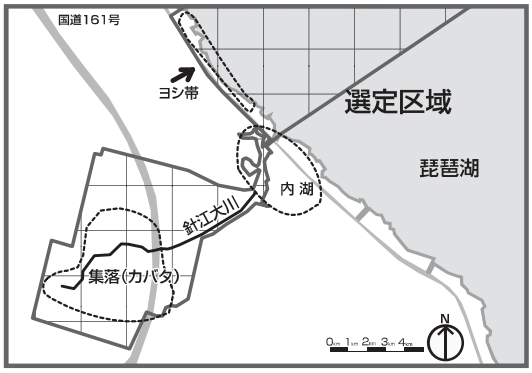
広報 たかしま 2010 10・1 No.124

『針江・霜降の水辺景観』重要文化的景観に選定

水環境利用と文化的景観の全体構造



新旭町針江・霜降は、安曇川によって形づくられた扇状地の中央部に位置する集落で、周辺には豊富な湧水等によって育まれた水田が広がっています。ここでは湧水を利用した独特の生活が営まれるとともに、集落・河川・水田・ヨシ帯等が一体的な水環境を形成する貴重な地域である事から、平成22年8月5日『高島市針江・霜降の水辺景観』として市内で2つ目となる重要文化的景観に選定されました。



▲重要文化的景観選定区域（新旭町）

針江・霜降地区には、針江大川や小池川など大小の川が流れていて、地域の北東部で合流し「中島」とよばれる内湖に流れ込んでいます。

内湖に集められた水は、いったん貯留され、水の中に含まれる栄養分は、内湖の底に沈殿し、比較的きれいになった上澄みの水だけが、琵琶湖へ流れ出す仕組みになっています。また、溜まった汚泥は水田造成の客土に、水底の水草は田舟で運ばれ、田植え後の追肥とされました。

これらの河川と内湖で行われた生業活動から、「集落ー河川ー水田ー内湖ー琵琶湖」をつなぐ、この地区全体の水環境システムが見えてきます。日々の営みは、すべてつながりがあり、身近な自然を「利用しながら手入れするシステム」が作り出されてきました。

「利用しながら手入れするシステム」は、地域内のあらゆる場所をつなげる空間的仕組みにもなっています。そしてカバタ、ヨシ帯などが結びついて全体で一つの「文化的景観」を作り上げています。

その中でも、カバタのある風景は、湧水が豊かな針江・霜降の象徴といえるもので、現在も生活の一部として使用されているものが多く、伝統的な水とのかかわり方を残す数少ない地域といえるでしょう。

人と水との深いかかわりのなかで残されたカバタ、そのカバタに新しい命を吹き込み、新しく文化として再生させようとする動きが始まろうとしています。そこには、大きな財産として次代に受け継いで行こうという地域の共同意識の深まりが感じられます。

（文化財課）

編集者のつぶやき

表紙は、びわこ全国青少年演劇祭の1シーン。子どもたちの演じる芝居にぐいぐい引き込まれました。演劇には、舞台ならではの臨場感が感じられるという魅力がありますね。今号の特集は市民劇第2弾「琵琶湖治水の物語」。江戸後期、琵琶湖の水害から農民や田畑を救うため立ち上がった藤本太郎兵衛の姿を描きます。今回は芝居・群読・太鼓とのコラボをされるということで、どんな劇になるのかとても楽しみです。（広報担当S）

■発行／高島市 編集／政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑540番地
☎0740(25)8000㈹
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。

広報 たかしま
2010 12・1
No.128

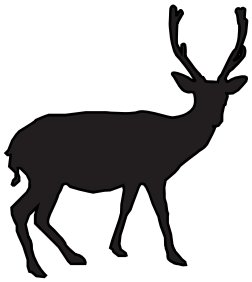
高島市 歴史散歩 No. 72

▲鵜川にあるシシ垣（中央の石垣）

シシ垣

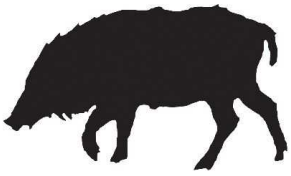
高島市の南東には明神崎があり、いにしえからの白鬚神社が鎮座しています。神社の南には鵜川集落が、美しい棚田と琵琶湖、それと里山に囲まれて見事な景観を呈しています。棚田と里山の境界を歩くと、延々と続く野面積（のづらづ）みの石垣に遭遇することがあります。（写真参照）石垣の高さは1メートル以上もあり、何の目的のために構築されたのかと不思議に感じます。

その正体は、現代人も悩んでいる獣害（イノシシ・シカ）から、棚田を守る猪鹿垣ことシシ垣です。秋、山から下って来て棚田の稲を食い散らす猪や鹿を防御する目的でシシ垣は構築されています。鵜川周辺では、花崗岩（かこうがん）の石材が取れることから、これらの石材を利用して石垣が造られています。よく観察をすると下位は大きい石を使っています。それは、ひとりで石材を積み上げる範囲の労働と考えられます。次に築造年代ですが古文書から1700年から1800年代にかけて造られたと推定されます。



では、何故このようなシシ垣が江戸時代後期に造られたのでしょうか？ 推測されるのは、この時期に猪や鹿が大量に生まれたか、天敵が少なくなったかが、要因と考えられます。シシ垣は西日本から東日本にかけて造られ、その分布から猪や鹿の害が広範囲に及んでいることがわかります。皆さんも里山でシシ垣に遭遇されたら、資料館まで連絡をしてください。調査にまいります。

問 高島歴史民俗資料館
☎（36）1553



編集者のつぶやき

▼日に日に寒さが増し、いよいよ年の瀬が近づいてきました。皆さん、今年はどのような年だったでしょうか？
▼表紙は、新旭北小学校100周年記念事業のようす。久しぶりに訪れる母校は、懐かしさを感じるとともに、変化も見られ新鮮でもありました。式典後は、ふれあいまつりが行われ、親子や地域の方で学校内が賑わいました。100年も前から、子どもたちがこの学校で育っていったかと思うと感慨深いものがありますね。（広報担当S）

■発行／高島市 編集／政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。